

---

社会福祉法人あむ  
平成26年度  
事業報告書  
決算報告書

---

自 平成26年 4月 1日  
至 平成27年 3月31日

---

社会福祉法人あむ  
理事長 松川 敏道

---

# 法人全体を通して

平成 26 年度は〈あむ〉がスタートして 6 年目の年であり平成 25 年度より考えてきた「法人の今後 10 年を考える」取り組みを実践へ移していく年として位置づけ、法人の発展、スタッフ全体のスキルアップ、地域とのつながりの強化を進めてきた。組織が少しずつではあるが大きくなってきており、法人の体制強化、世代交代を進めていくため、法人事務局を 2 名体制として、業務の引き継ぎを行っている。

## 1. 相談支援事業の充実

計画相談支援事業が始まり、〈相談室ぼぼ〉でも計画作成業務増えている。そのため、委託相談事業の業務を圧迫している現状が見られた。〈相談室ぼぼ〉では今後の〈相談室ぼぼ〉のあり方を考える会議を月に 1 度行い、現状の確認と今後の展望について話し合いを行っている。また法人としては、新たな計画相談部門の設置等、相談支援部門の強化について検討をはじめている。

## 2. 働きやすい職場環境作り

平成 26 年度は 1 名の育児休業明けのスタッフが短時間正職員として職場復帰をした。子育て中の職員が働きやすい事業所が限られているなど、まだまだ試行錯誤であるが事業所間の連携強化に努め、育児中の職員もそうでない職員も働きやすい職場環境作りに努めた。

## 3. 児童発達支援事業に・こ・ぱ 2 の設置

平成 26 年度は利用者からの要望を形にし、新たに〈児童発達支援事業に・こ・ぱ 2〉の事業を開始した。主に未就学児の午後の時間の療育を行い、〈に・こ・ぱ〉と連携をしながら、個別支援を重視した集団の中での育ちのアプローチ、不安を抱える保護者への助言や研修会の開催等きめ細かい支援を行った。

# 生活介護事業 びーと

## 1.事業の目的

利用者の思いに寄り添いながら社会参加や自己実現を目指すよう努めた。  
地域福祉の拠点としての社会的役割を果たせるよう努めた。

## 2.「わたし」の計画

「できる事」「やりたい事」「やってみたい気持ち」に着目し、本人が「やってみよう」と思える計画になるよう心掛けた。利用者主体の視点から「わたし」の気持ちを大切にし、相談を重ねながら計画を作成し、振り返りも行った。

1対1の対人支援の視点を大切にし、利用者が主体的に取り組めるようニーズに合わせて関わりや活動内容を変化した。

生活全体を意識した「わたし」の計画になるよう、事業所内だけでなく他の社会資源との繋がりも大切に進めた。

## 3.活動内容

「わたし」の計画に基づき、利用者本人が選択できるものであるよう心掛けた。

また、「楽しい」「嬉しい」「できた」「やってみたい」等の気持ちを大切にし、前向きな取り組みとなるよう努めた。

〈ぴーす〉では月1回作業メンバーによる「ぴーす会議」を実施。会議では売上目標の設定や制作品検討の他、「みせる」「はなす」「つくる」で役割を分け、それぞれで話し合いを進め活動に取り入れた。また、定期的にギャラリー展、サマーセール等のイベントを実施した事により地域の方に足を運んで頂くきっかけとなった。

全体として事業所内の活動だけに完結せず、地域の中で活動していく場面を数多く作るよう意識した。従来のお芝商店での調理補助、ポスティング活動の他にも、今年度は北海道大学外国人留学生会館空き部屋清掃を行った。様々な人間関係の中で貴重な体験を行う事ができた。

余暇活動に関しては「びゅーていー講座」等、活動種類のバリエーションを増やし幅広い内容の中から選択してもらえよう努めた。積み重ねて活動する事により参加メンバーの楽しみの幅も大きくなっていると実感している。

## 4.ボランティア

〈ぴーす〉での創作活動、〈びーと〉での余暇活動ともに多くのボランティア参加があった。メンバー交流、作品の質・量の向上等、多大な影響を受けている事から、次年度も継続していきたい。

## 5.事故防止

利用者が安全に安心して活動できる様に配慮し、事故なく1年の活動を行う事ができた。次年度も引き続き、利用者理解を深める事を徹底するとともにリスクマネジメントを意識し危険の予測と回避に十分に配慮した活動を展開していきたい。

# 居宅介護等事業 ばでい

## 1.事業全体

現在利用されている人達や以前利用されていた人達から新たなニーズがあり、利用希望の件数は多くなっている。また曜日や時間帯により利用希望が重なることが多かったため、他部署と連携を図り人員調整を行いながら可能な限り対応しサービスを行ってきた。しかし、求められるニーズは対応範囲を超える状況であり、6月以降はサービスをことわるが多かった。また新規の利用希望に関しては、受け入れ体制を整えることが難しかった。

## 2.他部署との連携

人員配置の調整については昨年度に引続き、サブチーフ会議を軸に連携を図りながら、利用希望の多い平日夕方以降のサービスを中心に対応をしてきた。支援者会議、事例検討の実施に関しては、次年度の課題となっている。

## 3.支援・業務の共有

平成27年度はスタッフの異動も多く、支援や事業の全体像を共有していく機会を増やすため、10月以降は月1回だったスタッフミーティングを、月に2回実施している。毎月の事務作業に関しては、常勤スタッフを中心として①請求業務②サービス予約・調整業務を数カ月単位で交代して行うことで、業務の共有を図り、臨機応変に動ける体制を作った。また書類の保管・整理を全員で分担して行い、業務時間の無駄を省く取り組みを実践した。

## 4.研 修

法人内部での研修への参加が主となり、特に年度上半期については、スタッフが個別で参加する研修の機会は少なかった。医療的ケアに係る「たん吸引等研修」、「行動援護従事者基礎研修」について各1名が受講した。

## 5.個別支援計画・モニタリング

利用者や家族の思いに寄り添った内容、視点を事業所内で再度共有し、新たな様式でモニタリングを実施している。また自分たちの支援が利用者本人にとってどのような役割や位置づけなのかを確認するためにも、サービス終了時など、本人・家族から自宅での様子や学校、ばでい以外でのご本人のことなどお話を伺うことを心がけ、取り組んだ。

# 児童発達支援事業・放課後等デイサービスに・こ・ぼ

## 児童発達支援事業 に・こ・ぼ2

### 1.目的・運営・保護者支援の充実

- ・〈にこぼ〉〈にこぼ2〉共に、保護者のご理解ご協力のもと、事業運営をスムーズに行うことが出来た。
- ・日常、保護者は困り感を持って生活をしていると考えられるが、送迎時だけでは、なかなか引き出せず電話での相談も少ない。こちらから設定した個別懇談・保護者学習会などへは参加者率が高いので、個別懇談の機会をもっと増やす必要があると感じた。
- ・保護者からの期待は高く、スタッフの質の向上に努めなければならないので、スキルアップに繋がるための経験・研修受講に努めながら、より良い活動提案をしながら、子どもたちの発達支援に取り組んでいく必要がある。
- ・〈にこぼ2〉では、狭い空間での活動の工夫、グループ分けをしながらの活動の組み立てなど創意工夫が必要になり、細かな配慮をしながら、共通認識が難しかった。
- ・職員の補充で、保育経験者が入ることにより、発達の見立てや集団活動を組み立てていく上で、子どもたちの把握等少しずつ変化が見られ、障がい特性をふまえた支援の在り方等、少しずつスタッフ間で話し合う時間を作りながら取り組むことが出来た。
- ・新たな試みとして、「にこぼまつり」は、普段の活動の紹介や活動の意味などを伝えられる良い機会になった。また保護者間の交流の場としても良い機会だったので、次年度も継続していく。

### 2.札幌市障がい児等療育支援事業

〈相談室ぽぽ〉からの紹介で、子どもの障がい特性についてや幼稚園等の会議参加などをしながら、保護者支援を行ってきた。実績は年4件。

### 3.職員育成・研修

・年度途中で数名の職員の入れ替わりがあり、日々の業務を確実にこなすことすら難しい状況が続いた。様々なことに配慮しながら発達支援を実施する必要があるが、いくつかの配慮や気づきをもって、接しなくてはいけないことに、スタッフのスキルが追いつかない難しさがあった。

・視野を広げるために多くの研修を受講したが応用するまでには至らなかった。また、仕事を伝える上で、言葉だけでは伝わりにくく、視覚的に伝えたり、業務の優先順位・時間の使い方を一緒に考えたりと、丁寧なスタッフ育成を行った。

#### ・研修

##### (1) 機関支援(おがる)

- ・事例検討 個別の見立て・支援内容の見直し・道具の工夫・視覚支援の使用について等
- ・アサーティブクラス 活動企画・特性シートについて・カード作成について等、情報提供やアドバイスを受けながら、継続して助言をもらう。

## (2) 外部研修

- \* 児童精神医学入門 「子どもの心の診療とは何か?」 「ADHD 注意欠如・多動性障害について」 「子どもの統合失調症」
- \* CDS JAPAN 北海道ブロック研修 「発達の捉えー不確実の中に見る可能性」
- \* 北海道小児急性期医療カンファレンス (PEACH) 「市中総合病院における児童虐待への対応」
- \* 札幌市自立支援協議会中央部会 「さっぽろ障がい者プランについて」
- \* 発達障がいと相談支援
- \* 障がい児通所支援事業所対象研修全3回 「地域療育の現状及びネットワークについて」 「事例検討」 「幼児期から学齢期の発達支援と特性発達支援のポイント」
- \* コラボ研修2014 「介護保険分野と障がい分野がお互いのことを知り合いながら事例検討できる人を増やす企画」
- \* 児童発達支援事業・放課後等デイサービス事業所対象研修会 「基礎知識グループワーク」
- \* 障がい者アート×デザインセミナー
- \* 子育て支援・子育て支援担当職員合同研修会 「子ども・子育て支援新制度」
- \* 北海道障がい者虐待防止・権利擁護研修
- \* 札幌地区児童発達支援連絡協議会職員研修会
- \* 札幌市自立支援協議会 子ども部会全体研修会 「青年期支援に関わって思う、幼児期・児童期支援に期待すること」
- \* 公開講座 「自閉症や発達障害の子どもたちの学校生活を考えよう」
- \* 教育・福祉・医療の連携についてのフォーラム
- \* 相談支援従事者研修フォローアップ研修 「障害児相談支援の本流」

## (3) 法人内研修

- ・ 相談室 ぽぽ 初回面談 ロールプレイ
- ・ 障害者差別解消法とわたしたちの課題

## (4) 事業所内研修

- ・ 事例をとおして、子どもを見たてる
- ・ 障害特性について
- ・ 日案の書き方

## 4.放課後等デイサービス

- ・ お仕事を意識した取り組みは、子どもたちや保護者からの評価も高かった。
- (1) 作品を作る⇒販売(なんきゅう夏祭り・にこばまつり等)⇒収益⇒収益で何をするか考えた結果・物品購入\*遊び道具:作品材料・交流会費・ごほうびお楽しみ
- (2) GAPお仕事体験(開店前の店内で、お仕事について学ぶ・体験する)
- (3) 就労支援事業所見学・体験を通し様々な仕事があることを学び、「あこがれ」や「やってみたい気持ち」などを大切にしながら、これからの選択の幅を見つけられる、基礎をつくってきた。

- ・自立活動

掃除、手順書を作成し確認しながら積み重ねている。

- ・アサーティブクラス（普通級に通っている子を対象）

アサーティブの考え方を活動の中に組み込み、活動の中に取り入れてきた。専門家に助言をしていただき、〈にこば〉スタッフと共に、表情カードや誉めカード・フィーリングシート（活動にどんな気持ちで参加したか・友だちの褒めポイント・自分のがんばったところ）を作成し、シートに記入し発表したり、誉めてもらったりしている。それぞれに感情があることや相手の気持ちを考えることができるための練習中。

【アサーティブネス】お互いの気持ちを考える、自分の要望や意見を相手に伝えるコミュニケーションの方法論。感情をそのままぶつけるのではなく、気持ちを言葉で表現しつつ、主張をしっかりと伝えようという考え方。

- ・余暇活動

ホリデーテレーリングを通し、サピカ利用や、社会的ルールを身につける活動を積み重ねている。

公共でのマナーが身につき、見通しがついてきて、活動も落ち着いて参加できている。

子どもたちや保護者からも好評で、期待度が高く、出席率がよく今後も継続していく。

## 5.連携支援のありかた

幼稚園や保育園・学校・セラピーとの連携については、保護者を通してやりとりをしながら、個別支援計画に基づいた支援のあり方などを話す機会に恵まれ、継続して行くことが出来ている。ネットワークを大切にしながら、連携を継続していきたい。

## 6.全体を通して

未経験者のスタッフや発達障がい児との関わりは初めてというスタッフなど、初心者であるスタッフがほとんどのなか、大きな事故なく活動を行うことができた一方、『ひやりはっと』を活用しながら、子どもの特性を理解する、スタッフ間の連携を密にする（声かけあう・事前準備等、わからないまま行わない等）などをミーティングで話し合いながら、情報共有の時間を多く確保してきた。

スタッフの「今年度振り返って」では、手ごたえがあったことや良かった事などでは、にこば祭の開催や子どもたちの笑顔、療育内容をみんなで考え実行できたことなどあげられていた。また、失敗したことやうまくいかなかったことでは、けが、配慮不足、ほうれんそう不足、共通理解などが挙げられていた。

子どもたちの、生活年齢と発達年齢の差を見極めながら、障がいの特性理解や集団活動での配慮点、個別課題のプロセスや課題設定、評価、保護者の困りごと相談など、様々な角度から一人の子どもをアプローチしていく、この複雑さが難しさを拡大しているため、こまめなフィードバックや勉強会を積み重ねてきた。

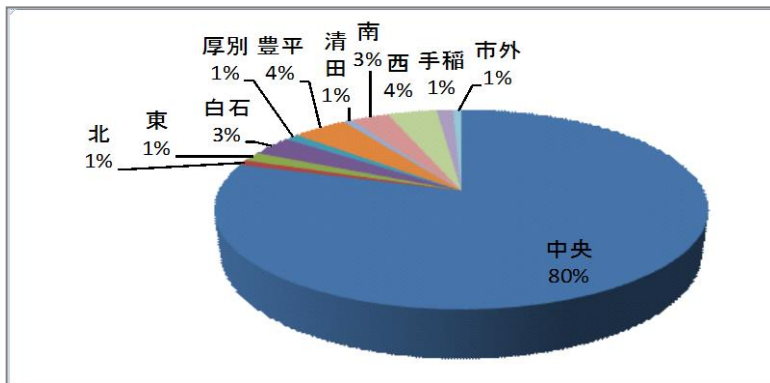
# 相談支援事業 相談室ぽぽ

## 1.年間利用実績

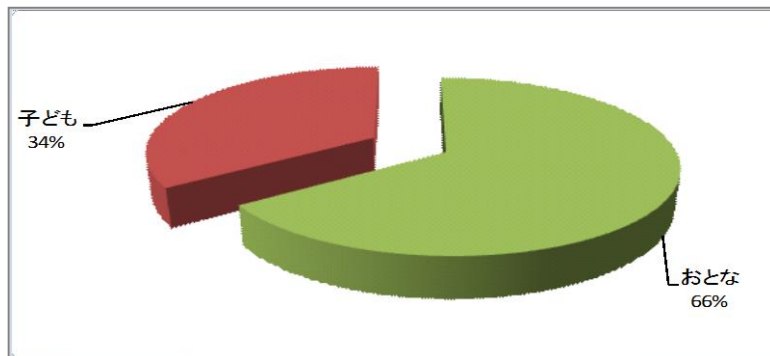
○平成27年3月末登録者数 465名

○平成26年度新規登録 124名（平成25年度：114名）

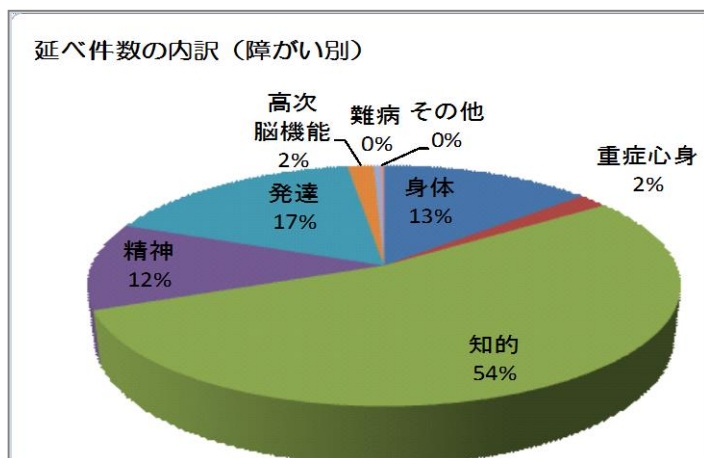
### ◆居住地◆



### ◆年齢◆

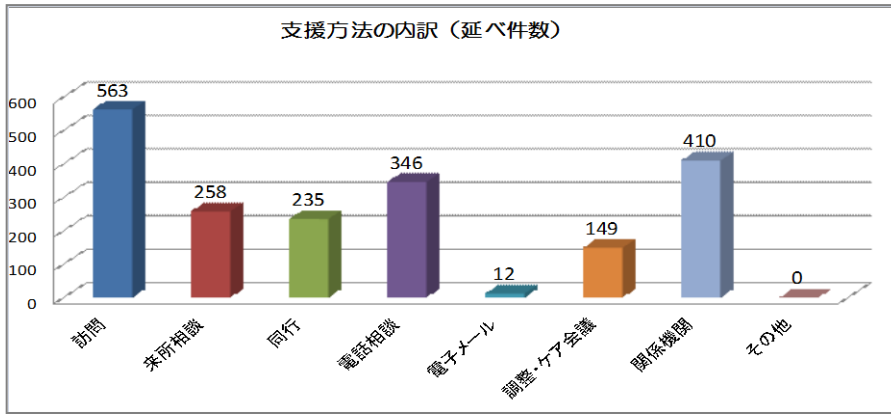


### ◆障がい◆





○年間延べ支援件数 1973件

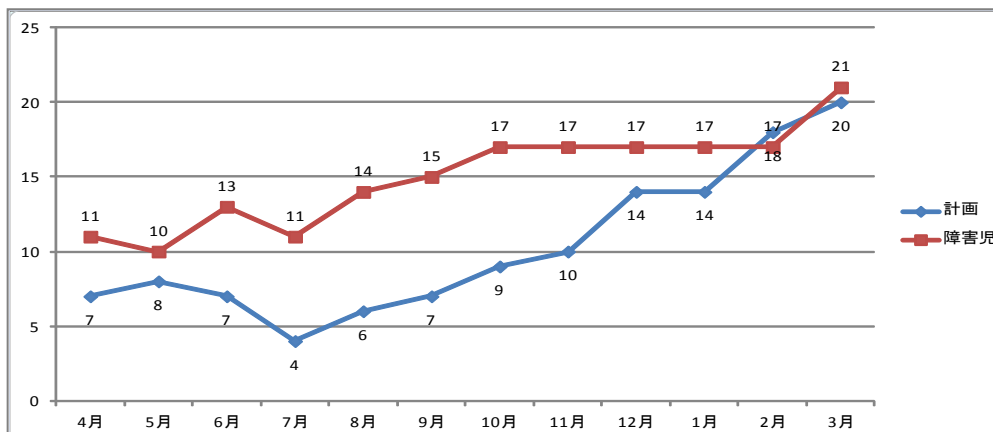


## 2.委託相談支援事業とサービス等利用計画の作成

今年度は専任スタッフ4名で委託相談と計画相談等を実施してきた。計画相談支援の対象が拡充した事により計画相談の比重が増大し、委託相談に要する時間が圧迫される現状がみられた。全体の相談内容の複雑化・多様化もあり、利用者にとって相談室が「身近な地域で気軽に相談できる場」として機能していく事の難しさを感じた。

今年度はこれらの課題を鑑み、月1回程度「相談支援のあり方ミーティング」を行い課題や解決方法を模索してきた。

○計画相談利用者数



## 3.コミュニケーション研究会

「話し合いや自己表現の場を通してコミュニケーションの基本を学ぶ事」を目的に、発達障がいのある成人の方等を対象にした『コミュニケーション研究会』の実施計画を作成した。次年度に具体的に取り組んでいく予定である。

## 4.ピアサポーター

知的障がいの方3名、視覚障害の方1名とピアサポーターの雇用契約を結び、札幌市全体のピアサポーター交流会等にスタッフと一緒に参加した。また、委託相談支援事業に位置付く「ピアサポーター事業」自体を見直す意見交換会にスタッフが参加してきた。

## 5.地域資源との関係、地域での役割発揮

身近な地域にある下記のような機関とつながりを作り関係を深めてきた。このようなか、相談員個々が様々なことを学ぶと同時に相談支援事業等に寄与することができた。

### (1) 中央区合同勉強会

相談支援に関わる情報共有、考え方の整理やすり合わせ計画相談の検証等を目的。区役所保健福祉課、委託相談事業所、指定相談支援事業所等で構成。

### (2) 札幌市自立支援協議会

- ・中央区地域部会（事務局）
- ・相談支援部会（定例会参加、企画推進等プロジェクトチームへの参加）

### (3) 外部講師の派遣等

- ・札幌市個別支援計画研修
- ・北海道相談支援従事者研修 など

### (4) その他

- ・相談員同士の各種のネットワーク（事務局等） など

## 6.相談支援スキルの向上

日常業務の中でのスキルの向上等をめざし、次のような取り組みを行ってきた。

### (1) 随時のミーティング（毎朝、及び随時必要に応じて）

個別相談の経過報告、事例の検討、スタッフの行動予定

### (2) 定例ミーティング（原則毎週水曜日、午前中）

個別相談の経過報告、事例の検討

### (3) 月末ミーティング（原則毎月最終金曜日、午前中）

会議、研修報告、スタッフ個々人の相談活動の振り返り

### (4) スペシャル・ミーティング（年に2回）

個別相談の継続、待機、終了の判断やそれらの目途をつける

### (5) その他

スタッフ個々人の「まとめる力」を養うために持ち回りにより会議録を作成する等

## 単独型短期入所事業 ふらっぷ

### 1.全体を通して

今年度も利用者が自宅で過ごすのと変わらないような支援を目指し、単独型短期入所事業を行ってきた。利用者がご自宅ではいつ食事をしているのか、余暇は何をして過ごしているのかなどを聞き、これを参考にスケジュールを立てている。

〈こまち〉でも短期入所事業を行っているが、グループホームと併設されている為、集団で過ごすことになる。その為、より個別の支援が求められる利用者には〈ふらっぷ〉を紹介し利用してもらっている。また、〈こまち〉が満床の場合や〈こまち〉では対応できない身体障がいをもつ利用者なども〈ふらっぷ〉を利用してもらっている。

スタッフは他の事業と兼務している為、〈あむ〉の各事業と勤務調整をし事業を行ってきた。そしてなるべくその利用者をよく知るスタッフが担当できるよう調整してきた。

しかしながらケアができるスタッフが少ない利用者もあり、利用希望があったがお受けできずお断りする場合もあった。

### 2.利用状況

今年度の〈ふらっぷ〉の年間利用者数は16人で年間利用日数は32日と少なかった。月平均では利用者数は1.3人で、利用日数は2.6日だった。

その大半のケースは利用者のご家族の休養の為や、ご家庭での用事の為の利用だった。1件ではあるが寄宿舍に行く予定があり、その練習で〈ふらっぷ〉を利用されたケースもあった。

利用希望自体が少なかったが、調整がつかずお断りしているケースもあった。

## 共同生活援助事業・併設型短期入所事業 こまち

### 1.全体を通して

(1) 一般の賃貸マンションであるメゾン伏見(3LDKの部屋を3部屋)とフローネ南10条(2LDKの部屋を1室)を借りて共同生活援助事業(グループホーム)と短期入所事業(ショートステイ)を行ってきた。グループホームは平成26年4月より全ての入居者が決まり、全11部屋で女性が5名、男性が4名暮らされている。残りの2部屋はショートステイ用で、利用希望に合わせ一時的に利用されている。

(2) 開設当初の入居者は、自宅とは違う環境の中でそれぞれの新しい生活を作り上げていった。そんな中、今年度は他の入居者へ意識が向く場面が多くなってきたように感じる。例えば体調不良等の理由で、いない入居者がいるとなぜいけないのかとスタッフに確認することがあった。また誕生会のメニューを決める時に自分の好きなメニューよりみんなが喜ぶメニューをあえて選ぶ事などがあった。

(3) これまで年末に「もちつき」、年始には「新年会」、入居者の誕生日がある月は「誕

生会」といった行事を行ってきた。今年度は「日帰り温泉ツアー」と題し始めて外出する行事を行った。初めてのことで緊張する入居者もいたが、入浴後のカラオケでは終了時間ギリギリまで歌うなど参加者は一様に楽しまれていた。

## 2.利用状況

グループホームの入居者は20～30代の方が多く、平日は〈こまち〉で過され週末は実家で過ごす方もいる。ショートステイの年齢は小学生から成人の方まで幅広く利用している。以下はそれぞれの26年度利用状況。

### グループホーム

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
利用日数	208	209	213	232	202	201	210	180	174	211	193	215

### ショートステイ

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
利用日数	29	53	42	40	48	30	31	31	20	13	21	27

## 3.事業規模の拡大

今年度は、新しい部屋（男性入居者用）を探し規模を拡大していく計画であった。消防法の改正では特別大きな変更はなく、現在の設備のまま事業を行っていくことが可能となった。しかしながら、消防法の改正がありその動向を見ていくというチーフ会議での判断により、次年度に向けて行っていくこととなった。

## 4.スタッフについて

〈こまち〉では新しくスタッフを雇った場合、現場での研修の他に新任研修というものも行っている。学生のスタッフが多く、さらに福祉関係の学校ではない者も多い。その為新任研修では〈あむ〉についての説明の他に、基本的な障がい特性（発達障がい・ダウン症・てんかん発作）等についても学んでもらっている。

またミーティングに関しては、常勤スタッフミーティングと学生スタッフ等も集まる全体スタッフミーティングを、それぞれ月1回開催することを、予定していた。しかしながら学生のスタッフがなかなか集まれず、全体ミーティングを開催できない月もあった。その際は日々の引継ぎの中でしっかり情報共有を行い、対応してきた。

# さっぽろ地域づくりネットワーク ワン・オール

## 1.はじめに

ワン・オールの事業受託2年目の今年度は、次の通りの役割分担で事業を行ってきた。

		主担当	副担当	備考
相談 支援	①委託相談支援 *改革推進PT ア. 事業の枠組み イ. 支援の枠組み ウ. 相談員の資質	大久保 渡辺 荒川 林	荒川 渡辺 小野寺	渡辺
	②計画相談支援	荒川	林	今井
	③地域相談支援	林	大久保	
	④精神障がい者地域生活移行支援事業（個別、仕組み）			
	⑤ピアサポーター支援	大久保	荒川	渡辺
協議 会	⑥まちプロ	林	大久保	小野寺
	⑦相談支援部会事務局	林	西尾	渡辺
	⑧事務局（運営委員会、全体会等）	林	大久保	小野寺
	⑨エリア ・中央区、手稲区、南区、清田区、西区 ・豊平区、厚別区、北区、白石区、東区	林 大久保	西尾 西尾	
そ の 他	⑩運営委員会	大久保		小野寺
	⑪研修担当	林		
	⑫庶務 ・実績報告（基幹、移行支援） ・事業所指定、事業契約 ・広報（パンフ、HP等） ・会計（小口現金）	林 大久保 大久保 林	林	

また、平成26年度の統計的な実績情報については別紙参照

## 2.相談支援業務

今年度、個別支援の実人数は、登録者13名、未登録者16名、延件数は158件。居住区があるケースについては、居住区の委託相談支援事業所へ、居住区の定まっていないケースについては、一定期間の支援を経て居住区が定まりしだい委託相談支援事業所へ随時引継ぎを行ってきた。

また、事業を進める中で多様なケースが持ち込まれ“他の委託相談支援事業所で行うことが難しい相談支援業務”についてより具体的に整理し、取り組んできた。

(1)市外からの転入に伴う相談で、札幌市内で居住する区が決まっていないケース

- (2)地域生活定着支援センターから依頼のあった特別調整等のケース
- (3)札幌地方検察庁社会復帰支援室から依頼のあった釈放見込みケース
- (4)精神科に入院中で退院請求のあった、札幌市内で居住する区が決まっていないケース
- (5)その他何らかの理由で居住区の委託相談支援事業所が取扱えないケース

### 3.委託相談支援事業の支援業務

委託改革推進については、札幌市自立支援協議会相談支援部会の定例会や管理者会議の場で、より具体的な結果を示すために、意見交換や協議を行ってきた。

- (1)「ア 事業の枠組み」について、“欠員が生じた場合の委託費の減額”について契約書に明記したり、“ピアサポーター事業”について実施状況報告書の様式改訂、“開所時間”や“相談支援事業所を不在にすること”については要綱に明記など一定の成果があった。
- (2)「イ 支援の枠組み」についても、“地域相談の様式”を作成した。ただし、整理中の項目もあり、今後も継続が必要となっている。
- (3)「ウ 相談員の枠組み」については、“「人材育成」と「スキルアップ」研修”と“新任職員研修”の主催開催や、“ワン・オールが行う相談支援業務”の明確化、『ワン・オールかべ新聞』（ホームページ）と『ワン・オール・プレス』を活用した“情報の集約と発信”を行った。
- (4)札幌弁護士会の刑事弁護プロジェクトと共催研修を年度で4回開催し、委託相談支援事業所と司法の関係機関で顔を合わせながらお互いを知り合いつつ学ぶ場の提供を行った。
- (5)1月から2月にかけて、区毎に委託相談支援事業所との懇談を実施し、区毎の地域部会や相談支援体制について意見交換を行い、現状の確認と、課題を探ってきた。

### 4.計画相談支援の推進業務

- (1)7月から計4回、『指定特定相談支援事業所拡大打合せ』を札幌市と行い、計画相談対象者拡大前の9月には札幌市主催の『計画相談支援等に関する説明会』に協力した。また、委託相談支援事業所を対象とした『How to 研修』を、開催規模を意図的に小さくし、同一の内容で3回開催した。
- (2)相談支援従事者研修など、札幌市や北海道が開催する相談支援に関係する研修会等への協力を行った。
- (3)サービス等利用計画の検証について、次年度からの仕組みを具体化するには至らず、今後も検討を続ける。

### 5.地域相談支援の推進業務

地域相談支援の推進に向けた具体的な手立てを探る糸口として、8月に精神科救急入院（スーパー救急）病棟を有する4病院と、11月には市内にある救護施設4施設を訪問し、意見交換を実施した。地域相談支援の実施状況把握や推進に向けた検討は今後も継続して行う。

## 6.障がい当事者による相談支援活動の支援業務

- (1)『ピアサポーター配置事業所意見交換会』では、機能強化事業のピアサポーター活動のあり方について意見交換、協議を行った。今後も継続しつつ、今年度は『実施状況報告書』のフォーマットを改訂する提案を相談支援部会で行い了承された。
- (2)『ピアサポーター交流会』は日常の活動についての情報交換を行いつつ、研修会開催に向けた話し合いなどを行った。

## 7.札幌市自立支援協議会の事務局業務

当所では協議会全体の事務局と、相談支援部会事務局を担い、次について運営がスムーズに行われるための、調整、準備、報告等の業務を行った。

- (1) 全体会 2回
- (2) 運営会議 2回
- (3) まちの課題整理プロジェクトチーム 12回
- (4) 重複障がいに関する課題整理に係る有期プロジェクト 4回
- (5) 相談支援部会事務局会議 8回
- (6) 相談支援部会定例会 6回
- (7) 相談支援部会管理者会議 2回
- (8) 相談支援部会全体会 1回
- (9) 相談支援部会プロジェクト 7回
- (10) 相談支援部会プロジェクト企画研修 3回
- (11) 相談支援部会交換研修 26件

このほか、各区の地域部会にもオブザーバーとして102回参加。

今後も、札幌市自立支援協議会全体の活性化のための取組をより具体的に実施していく。

## 8.その他

- (1)関係機関との連携推進のための諸会議の参加を意識的に行った。
- (2)運営の中立性を保つために、基幹相談支援センター運営委員会要綱にしたがい、6月と3月に運営委員会が開かれ、事業の推進状況、今後の課題について審議された。

## 9.ワン・オールミーティング

ワン・オールミーティングについては、原則として週に1回以上実施とされていたが、他の業務との関係や、出向による兼務などにより35回の開催にとどまったため、1回あたりの時間を延長するなどの工夫を行った。

## 10.ワン・オール・プレス（機関紙）

- (1)『ワン・オール・プレス』については、今年度5回発行し、ワン・オールの活動報告等を掲載した。また、ピアサポーター特集号では、わかりやすい版として、ルビのほか記載の仕方にも工夫をしている。
- (2)1月には『ワン・オールかべ新聞』としてホームページの運用を開始。研修や制度、協議議会などの情報を集約し発信しているほか、ブログによる活動報告も随時行った。

## 地域ぬくもりサポートモデル事業

地域ぬくもりサポートモデル事業は、障がいのある人や発達に心配のある子の日常生活を地域全体でサポートしていくため、地域住民（地域サポーター）による有償のボランティア活動を推進する札幌市の事業である。

当法人が札幌市より運営委託を受け、地域ぬくもりサポートセンターとして、手助けを求めると、誰かの役に立ちたいという想いを持った地域サポーターをつなぐ役割を担い、活動を展開している。

「地域に暮らす人同士、お互い対等な人間関係のもとで築かれる助け合いの輪を広げていきたい」というこの事業の趣旨は当法人のミッションである「出会いからつながりを編み、結び目を作る」と理念が合致しており、ミッションを体現する事業と言える。

平成 26 年度は 7 月より利用者の対象地域が中央区の他、南区にも広がり、利用者、地域サポーターとも登録者を増やすことができた。

サポーター年齢層・男女比

利用者年齢層・男女比

	男	女	合計		男	女	合計
10代	1	6	7	10歳未満	16	8	24
20代	15	22	37	10代	5	4	9
30代	16	14	30	20代	3	2	5
40代	10	23	33	30代	0	5	5
50代	6	9	15	40代	3	3	6
60代	12	17	29	50代	2	3	5
70代	5	8	13	60代	4	6	10
80代	0	1	1	70代	3	4	7
合計	65	100	165	80代	0	3	3
				90代	1	0	1
				合計	37	38	75

月別支援件数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
37	40	38	34	30	38	39	30	37	47	43	51	464

支援件数は徐々に増えてきており、月平均約 39 件となっている。障がいをもつ人や子の事業所、学校からの送迎、一人暮らしの人の話し相手、下肢に障害をもつ人の家の除雪、視覚障がいをもつ人の外出同行、精神障がいをもつ人の部屋の片づけ、大工仕事など支援内容は多岐にわたっている。



1対1の活動に不安や抵抗感があるサポーターに対しては、〈びーと〉〈にこば〉の日中活動に参加の受け入れも行っている。

地域の役に立ちたいという思いを持つサポーターの力を生かすことで、地域に住む障がいをもつ人、子の新たなニーズを発掘し、障がい者支援の知識や経験等を持たない人による支援、障がい福祉サービスの枠組みによらない支援の可能性を広げることができた。

課題として中央区に比べ、南区は面積が広く、地区間の距離が離れており、公共交通機関での移動に時間がかかるため、車で移動ができないサポーターの場合、活動できる範囲が地区内の徒歩圏に限られてしまう。地区により利用者とサポーターの登録者数に偏りがあるため、市内全域から集まりやすい中央区に比べ、マッチングが難しく、利用者の依頼にすぐに応えにくいことあげられる。

南区における活動は中央区と様々な意味で違った条件下での活動となっており、全市拡大へ向けての試金石として、今後の当事業のあり方が試されていると言える。

南区エリア事業拡大記念講演会として、「自閉症・発達障がいのある人を地域で支えるために」と題して、講演会を主催し、自閉症、発達障がいのある人についての理解を深めてもらうための講演と、自閉症がある人の家族から地域で暮らしてきた中での課題やエピソードを伺った。

日時 10月30日（木）14時30分～16時30分

会場 ユニバーサルカフェ minna（南区真駒内上町3丁目2-12）

内容 「自閉症・発達障がいのある人を地域で支えるために」

西尾 美里さん（札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる）

「自閉症のある子を街で育てるということ」

岩淵 真知子さん（自閉症児家族）

10月15日北海道新聞、11月6日NHKテレビ「おはよう北海道」、11月26日朝日新聞、12月8日NHKテレビ「おはよう日本」と、立て続けに新聞、テレビ等マスコミに活動について取り上げられる機会が続き、取り組みを全道、全国にアピールすることができた。

# ワンマイルネット事業

## 1. ワンマイルネット事務局

ワンマイルネット事務局はワンマイルネット事業の会計、賛助会員管理の他、イベント情報の発信や問い合わせに対する連絡窓口としての役割を担っている。

また幌西第12分区町内会班長業務や西屯田南8条商工会会員として、総会、行事への参加、中央区ボランティア連絡会理事として、中央区内のボランティア団体との交流、情報交換等を行った。

### ●ワンマイル事務局活動記録

4月17日	中央区ボランティア連絡会総会
5月10日	幌西第12分区町内会総会
5月15日	あけぼのアート&コミュニティセンター地域連絡協議会
6月1日	幌西第12分区町内会花植え
7月8日	中央区ボランティア連絡会 環境美化ボランティア
7月13日	幌西地区連合町内会 夏祭り
8月24日	幌西地区連合町内会 運動会
11月12日	幌西第12分区町内会 わんぱく公園第1回住民説明会
11月20日	あけぼのアート&コミュニティセンター地域連絡協議会
12月9日	札幌市ボランティア連絡会 10周年記念講演会
12月16日	幌西第12分区町内会 わんぱく公園第2回住民説明会
1月7日	西屯田8条商工会 新年会

### 《ころころひろば》

毎週水曜日午前10時から11時30分まで、〈に・こ・ぱ〉を会場として、集団での活動が苦手な子でも安心して参加できるよう、少人数規模の子育てサロンとして活動している。

中央区子育て支援課、地域の児童会館の協力を得て、チラシ配布などの活動のPRに努め、新たな参加者が徐々にではあるが増えてきている。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
参加者数	10	11	14	25	27	11	14	11	21	3	8	10

### 《リトミック教室》

6～8月の第1・3木曜日に実施。9～11月にも行う予定だったが、予定を変更し、1月に「ダイナミックリトミック」として、それまで行っていたリトミックよりも、大きく体を動かすリトミックのイベントを行った。イベントには8組の親子、計20名の参加となり、お子さん・親ともに楽しんでいる様子だった。平成27年度のリトミック教室の宣伝も行っている。

## 《ばんごはん食べてけば?》

毎月第2木曜日の夕方に実施、月平均40名の参加があった。地域の方に参加して頂く第1歩として「お隣りマンションチラシ」のポスティングを実施。初めての参加やボランティア参加して下さるなど、取組みを知って頂いた上でのリピーターが増え、効果が得られた。

売上に関しては参加費を見直し、大人300円・小学生100円として、収支がほぼ同額となっている（月平均12,000円）。また「北海道新聞社会福祉振興基金」の助成35万円を受けてミニイベントを実施、参加者同士の交流を図った。

## 《なんきゅう夏祭り》

日時 7月27日（日）

会場 わんぱく公園（中央区南9条西12丁目）

〈あむ〉周辺にお住いの方々にも協力頂き、実行委員会を発足し企画・運営を行った。

また、今年度は初めて会場をわんぱく公園に移し開催。〈あむ〉の関係者だけではなく、大人から子どもまで地域にお住いの方も数多く来場頂いた。

## 《お知り合い協会》

今年度は、昨年度に引き続きより世話人（当事者）の方々が主体となれるような運営を心がけサポートを行った。世話人の方の意識も変わりつつあり、会議では世話人の方が中心となり参加者が楽しめるイベントの企画を行ってきた。毎年恒例となっているお知り合い元気フェスタでは、前回の参加者アンケートの反省を生かし世話人同士で改善策を話し合い、結果大成功させることが出来た。

日程	内容	参加者
6月8日	焼肉パーティー in 八剣山	15名
11月2日	元気フェスタ	80名
1月24日	新年会	23名

## 《アフリカダンス》

6月、12月の2回、イベントを行った。ポスターをデザイナーの方に依頼したことで見やすくなり、掲示場所もエスニック調雑貨店や喫茶店にも掲示させて頂いたことで、一般の方の参加も増やすことが出来た。

## 《コーヒー教室》

「人と人との繋がりを編む」という〈あむ〉の理念から、地域の方々との交流を目的にしてスープカレー教室を実施してきたが、平成26年度は講師とのスケジュール調整が難しく、開催することが出来なかった。平成26年度はコーヒー教室として開催した。

講師は、ワンマイル徒歩圏のコーヒーショップ「コーヒービーンズ」の成田さん。初心者向けに、コーヒーについて（生産者や豆の種類等）教えて頂いた後に、家でも出来るコ

ーヒーの淹れ方を実演、実習。新たな発見や、家でも美味しく淹れられる簡単な方法を学ぶ機会となり、参加者からも「美味しいコーヒーの淹れ方を実践しながら覚える事ができて良かった」「また参加したい」という反応を頂けた。また、「日常のことを忘れられる良い時間になった」等の感想もあり、有意義な時間となった事も伺えた。

場所：旭山地区センター

参加人数：9名 託児あり（1名利用）

会費：600円

## SAT 研修班

### 1.研修スケジュール

基本的な知識の獲得は、各スタッフが自主的に行い、SATでは専門的な知識・技術の習得を図るため、以下のような研修を行った。

5月 ディナーミーティング（サイコロトーク）

7月 障がい者差別解消法とわたしたちの課題（松川理事長）

8月 アサーティブコミュニケーション講習（合宿、姉帯美和子さん）

10月 発達障害の勉強会+事例検討（おがる山本さん）

12月 実践発表（SAT内）

2月 おためし実践交流会

- 年間計画を立てた段階では毎月なんらかの研修を企画する予定であったが、実行できない月があった。計画に詰め込みすぎて、計画に無理があったと反省している。  
研修を行うための、事前準備（内容作り・中身作り）には時間をかけ丁寧にすることができ、よりよい内容のものができる。
- ディナーミーティングでは、小グループで他事業所のスタッフと、普段中々話せない内容のことを「お題を書いたサイコロ」を使用することで話しやすくすることに配慮した。
- 札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる 山本彩所長をお招きして、自閉症の基本的理解や診断基準について学んだ後、3事業所から出された事例検討を行った。終わってからのアンケートの中で、外部の意見やアドバイスをいただくことが有効に感じたとの声もあり、利用者に関わっていく上で考えを広げることができた。
- 今年度初めて「実践交流会」を企画した。各事業所（事務局、ぬくもりサポート事業を含む）から計9件、日々のさまざまな取り組みの工夫や展開の過程が報告され、職員からも継続して実施したいとの意見が多く寄せられた。

### 2.研修情報の共有について

研修等情報の共有を図るため、パソコン内のスタッフ共有フォルダに「最新おすすめ研修・資料はこちら」というフォルダをつくった。また参加した研修の資料も入れておくフォルダを作り、共有できるように工夫している。

## 実習受け入れ

社会福祉士、介護福祉士を目指す大学生、専門学校生の実習を受け入れた他、作業療法士を目指す大学生の実習を受け入れた。

サブチーフを中心として実習受け入れ委員会を組織し、実習スケジュール、事業所間の連絡調整、実習生への指導、助言、養成校との連絡調整等を行った。

法人、事業についての理解を深めてもらうためのオリエンテーション、実習生が分からなかったこと、困ったことなどの疑問点、悩みを解消するためのフィードバック、スーパーバイズ等を通して、実習指導者自身が自分たちの仕事を振り返り、指導力、伝える力を身につける機会になっている。

### 実習受け入れ委員会

- ・ 責任者：社会福祉士実習指導者（法人事務局：姉帯）
- ・ 副責任者：各部署のサブチーフもしくはそれに代わる者
- ・ 社会福祉士実習指導者：4名（平成26年3月現在）

### 実習受入実績

- ・ 社会福祉士実習 23日間 札幌学院大学 人文学部 人間科学科3年：2名
  - ・ 社会福祉士実習 23日間 北星学園大学 社会福祉学部 福祉計画学科3年：1名
  - ・ 社会福祉士実習 23日間 日本福祉大学 社会福祉学部 通信教育部：1名
  - ・ 社会福祉士実習 23日間 大原医療福祉専門学校：1名
  - ・ 地域作業療法実習 5日間 北海道文教大学 人間科学部 作業療法学科：2名
  - ・ 介護福祉士実習 5日間 札幌福祉専門学校 介護福祉学科1年：2名
  - ・ 地域作業療法演習 2日間 札幌医科大学 保健医療学部 作業療法学科3年：2名
- 計 11名 104日間

## ami.com 広報活動

〈あむ〉の活動を多くの方に伝え、理解、共感を得ることで、支援者を増やしていくこと、また支援者、関係者等に対し、情報開示に努め、説明責任を果たすことでコンセンサスを形成することを目指し、広報活動に取り組んできた。

### 1. わんまいる・みゅーじあむ

事業や活動を伝える機関紙〈わんまいる・みゅーじあむ〉を年2回、10月と3月に発行した。レイアウトや文章校正など、読みやすいものをつくるよう心がけた。しかし、読み手（ターゲット）が誰なのかによって更に内容も変化していく必要があるため、どのような人に読んでもらいたいのかを整理することも必要かも知れない。また、13号よりルビは手書きで行い、温かみや作業効率がUPしたが、ルビ版の必要性も含めてルビの作成は今後も検討が必要である。

## 2. 掲示板・ブラックボード

掲示板は、より見やすいようにレイアウトを考えた。次年度も引き続き行ってほしい。

ブラックボードは、〈ばんごはん食べてけば！？〉担当にお願いをしている。

## 3. ホームページ・ブログ

ブログ〈あむ的日常〉はスタッフが自由に書き込み、インターネット上において、各事業所の活動やイベント情報を発信する場として活発に機能している。

ホームページに関しては、刷新することを考えていた。新しいホームページのことを広報スタッフのみで考えていくのは、難しいと感じた。今後どのように進めるか検討が必要である。

また、ブログや〈わんまいるみゅーじあむ〉でイベントの様子を写真で伝える場面も増えているため、広報するための写真を意識して撮るようにした方が良いと感じた。イベント時など広報スタッフが写真担当になるのも良いと思われる。